足立区教育委員会指導力向上中核校

# 渕江小学校　外国語活動・ 外国語科研究通信

第３号
令和５年７月

今年度第3回目となる外国語活動・外国語科の研究授業を 奥田 健介 教諭が行いました。協議会では、中間指導の効果と、本授業における「書くこと」の指導について協議を行いました。指導・講評では、玉川大学文学部英語教育学科教授 工藤 洋路 先生よりご指導いただき、研究を深めました。

## 研究主題

**関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成**
**～思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～**

授業者：6年1組 担任 奥田 健介 教諭
単元名：**NEW HORIZON Elementary English Course 6 Unit 3 Where is the best place in Adachi?**
指導講評：玉川大学文学部英語教育学科教授 工藤 洋路 先生より

**〈研究経過報告〉**

**研究の視点について**

**視点１　目的や場面、状況等を明確にした言語活動の工夫**

単元の始めに、『足立区のおすすめの場所や食べ物などをALTに紹介をする』という最終活動を行うことを伝え、どんな表現や語句を身に付ければよいかを児童が見通しをもてるようにした。また、授業前半で渕江小学校の教師が最終活動で行う発表例（足立区のおすすめ紹介）を示している動画を観せることで、最終活動のイメージをより明確にした。

**視点２　表現を繰り返し使うための工夫**

単元目標を毎回の授業の始めに確認することで、発表に必要な表現を繰り返し話したり聞いたりしようとする意識を高めた。また、教師と児童によるスモールトークや何度もペアを変えて児童同士のやり取りを行い、自分の「伝えたい」表現を整理し、発表に必要な表現を繰り返し使う機会を設け、定着を図った。

**視点３　効果的な中間指導**

中間指導では、児童が伝えたい表現を全体で共有し、既習表現や語句が活用できるか考え話し合う時間を設けた。また、わからないことの教え合いだけにとどめず、自分や友人のよい工夫を共有することで、さらに具体的なやり取りに挑戦しようとする意欲を高めた。

**〈授業者自評〉**

教科書における単元の内容は、「おすすめの国を紹介する」ものであるが、今回は、渕江小学校の6年生の実態を踏まえ、「足立区のおすすめを紹介する」活動へと変更した。単元目標には、ALT である「ポール先生」に、自分たちの親しみが深い「足立区」を紹介することを目標とすることで、児童の意欲が高い状態で単元がスタートできた。

本単元においても、言語活動・中間指導を中心に英語力の向上を目指してきた。それに加えて、「書くこと」についても取り組んでいく必要があると感じているため、今回を契機に学校全体で深めていきたい。

**〈研究協議会〉**

**単元目標について**

・活動を「足立区」の紹介にしたことで、児童が知っている情報を「伝えたい」という気持ちをもって学習に取り組めていてよかった。教科書の内容は海外について伝えるものになっているが、単元を進めるうえで生じた難しさはあったか。

**→ポール先生の人柄の良さから、自分たちの暮らす足立区を紹介したい!という児童の思いを高めることができた。語句に関しては、「visit」,「buy」の単語を出すことが困難だった。足立区で何か特別なものを買うことが少ないため、先生の動画で「buy」を積極的に出すことで、対処した。「visit」を出すのは非常に難しく、なかなか使わせることができなかった。(奥田)**

▪「足立区」を題材にして行う活動はよかった。同じ認識をもって伝えあっているから、友達のフォローも入りやすく、コミュニケーションがスムーズに進んでいた。話を広げようとする子どもたちの意識が素晴らしかった。

**中間指導について**

・中間指導をする際、児童から出てくる「～が言いたいけど、言えなかった。」という発言に対して、解決策を提示できるか不安。特に、アドバイザーの先生がいらっしゃらない場合に、何かよい方法はあるか。

**→振り返りシートを児童との交換日記のように活用している。言えなかったことや、言いたい表現を「具体的に」書かせているため、児童それぞれが伝えたいことを把握できる。把握したものは、どのような英語表現を使うべきか調べ、メモをして授業に臨んでいる。(奥田)**

**書くことの指導について**

・書くことが中心の授業にしては、所要時間が短かったのではないか

**→中学校は文法指導中心、文法を手がかりに話し方を学習する。小学校は、聞き慣れていること、話し慣れていることを書き写すため、如何に言語活動の中で習得させられるのかが重要であると考えている。言語活動をメインとして、書くことの指導は、文字指導(きちんと四線の中に記入できる。ピリオドを打てる。など)を適切に行えば良いと考えており、活動時間は関係ないと考え指導しているがご指導いただきたい。(奥田)**

**→今回の授業では、書いた文は、「Where is the best place in Adachi?」であった。文をなぞることは1回、4線に写すことは1回の計2回書かせたが、書くことに慣れさせるためにも、早く書き終えた児童に対しては、4線に2・3回書かせてもよかった。(工藤先生)**

・ワークシートで文章を書く際に、注意点を丁寧に確認することで、英語学習の障壁をなるべく少なくする工夫があってよかった。

**〈指導・講評:** 玉川大学文学部英語教育学科教授 工藤 洋路 先生**〉**

**書く指導の基本事項**

・「書く指導」を行う上で、コミュニケーションを通して「話している」ことを「書くこと」が基本。

・「コミュニケーションで使っている。」「先生がよく話している。」「教室や学校内に掲示されている。」といった身近に広がっている言葉を文字として認識させることが大切。

・聴覚情報と視覚・文字情報とをリンクさせることが大切。聴覚情報だけでは、今回書いた、「Where is the best place in Adachi?」の中の「the best place」を1単語だと勘違いする児童も出てくる。そういった間違いを減らし、中学校以降の学習にもつなげていくことが重要。

**中間指導の在り方**

・中間指導を大切にしているが、何を重点にしているかが大切。あらかじめ教育的な意図を考えて中間指導をしなければ、身に付けるべき英語から逸脱することもある。複数回中間指導を行う場合は、「1回目は、この指導内容を、2回目は、、、」と、指導ポイントについてあらかじめ計画を立てた上で進めていけるとよい。今回の授業では、ポップコーンのフレーバーについて時間をかけて指導をしていたが、ポール先生に足立区のよいところを伝えることが目標の活動であったので、その点は指導の優先順位としては高くはない。ポール先生に何を伝えることがよいかに着目させ、「内容」を考えさせる指導をより重点的に行うとよかった。

**文法的な正しさの重要性**

・中間指導の際に、「B has A.」を用いて、「Bには、Aがある。」と表現させていたが、「You can see A in B.」の方が文法的に適切であった。小学校段階での指導の難しさでもあるが、多少でも文法的に間違いがあると、中学校で学習する際に、児童の覚え直す負担が増加する。中間指導の際は注意するべき。

**モデルの提示とタイミング**

・本授業において、教師のおすすめを紹介するビデオを授業冒頭に流したのはよかった。児童も意欲が高まったと同時に、表現の確認にも役立っていた。また、自分は何を紹介しようか思考を深める時間にもなったのではないか。

・モデルを提示するタイミングは、毎回授業冒頭でなくてもよい。授業ごとに提示すべきタイミングを図って行うべき。例えば、中間指導の際に、児童が表現する内容に困っているのであれば、その際に提示すれば効果はより高い。

**学習環境**

・「書く指導」を行う上で重要な要素の一つとして、学習環境や用具の整備がある。今回の授業内で、短い鉛筆を使っている児童が何人かいた。特に4線に記入する際は、適切な長さの鉛筆と、適切な姿勢を意識させるべき。

**「小学校段階においては、言語活動がメインになる。現在研究を進めている、「言語活動の充実」、そしてそのための「中間指導」をより一層高めるとともに、「書くこと」の基本的なことを実行していってほしい。」**